

発掘調査の概要

藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡の調査

(飛鳥藤原第187次)

2015年11月に始まった飛鳥藤原第187次調査は、2016年度になってから佳境を迎えました。前号の奈文研ニュースNo.61では、藤原京期の大型掘立柱建物の確認と、弥生時代の円形周溝墓の発見を報じていました。4月以降は、藤原京右京九条三坊東北坪(調査区西半)でみつかった大型掘立柱建物や、西二坊大路に沿う南北塀などの完掘、それに斜行溝(古墳時代)や土坑(弥生時代)、井戸(平安時代)の調査を進めてきました。

しかし最も注目を集め、調査にも時間を要したのが、弥生時代の円形周溝墓でした。瀬田遺跡における円形周溝墓の発見は、各紙によって予想以上に大きく報道され、現地見学会への参加者もおおよそ1,750名と盛況でした。この記事を書いている7月上旬の時点で、周溝墓の調査は一部を除き完了していますが、周溝内から保存状態のよい土器群が出土し、記録の作成に時間をかけた時期もありました。

今回みつかった円形周溝墓は、直径約19mの円形で、幅約6mの周溝をめぐらせたものです。陸橋部を合わせた周溝墓の全長はおよそ25mで、主軸は北でやや東へと振れています。墳丘はすでに削り取られているため、その周溝を丁寧に掘り下げることが心がけました。

現場班では、①現代のかく乱坑によってひどく破壊された陸橋部の確定と、②周溝の埋没過程の解明とを重要課題とみなしており、調査の成否はまさに

この2点にあると考えていました。陸橋部の西縁はかなり明瞭でしたが、そのいっぽうで東縁は保存状態が悪く難渋しました。それでも、基盤層(シルト層)に特有の流文構造を手がかりに、陸橋の東縁を識別することができました。

周溝埋土の堆積順序を検討した結果、埋没過程は次のとおりでした。まず、周溝の底にはシルト質のブロックを多く含む土層(加工時堆積層)が一様に堆積します。次いで、その上には土器や有機物を多く含む黒色土が溜まり、周溝の肩付近には黒褐色土が堆積します。最後に、黒色土を厚くおおう土層が堆積し、周溝は埋まってしまいますが、墳丘の東側は砂・シルトの互層によって埋没していることがわかりました。弥生土器が多く出土したのは黒色土や黒褐色土で、ことに周溝の東北部に集中する傾向がありました。これらの土器は庄内0式期前後(2世紀後半)のもので、周溝墓の築造時期を示すとともに、良好な一括資料としても今後注目されるでしょう。

4月から調査を引き継いだわが現場班には、弥生時代や古墳時代の専門家がいません。円形周溝墓を掘るのも、むろん初めての経験です。しかし、内外から様々なご教示やご支援を得て、必要にして十分な調査ができたものと同自負しております。今回の調査成果や出土資料が、弥生時代の研究に活かされることを願ってやみません。

調査はまだしばらく続きます。実は完掘した周溝の底やかく乱坑の底部等から、縄文土器や石器が出土しています。瀬田遺跡は縄文時代から弥生時代・古墳時代を経て、平安時代にいたる複合遺跡なのです。(都城発掘調査部 森川 実)



周溝墓の全景(南から)



周溝東北部の土器出土状況(北西から)